2023/02/11

第9回臨床哲学フォーラム
「狂気な倫理:『愚か』で『不可解』で『無価値』とされる生の肯定」(規範の外の生と知恵)

檜垣立哉さんのコメントへの応答

河原梓水

小西さんから、本論集(『狂気な倫理』)の意図として、「小泉義之のエクリチュールへの応答」を意図したものではない、という説明があったかと思います。その上で、私のほうからはあえて、小泉義之のエクリチュールを巡る応答をしたいと思います。

檜垣さんは、「小泉義之のほぼすべての主張は無理筋あり、実現不可能であ」り、したがってこれをパフォーマンスと受け取った上での応答が求められる、と述べられました。その上で、小泉義之のパフォーマンスは、ある種の矛盾を抱えた自己諧謔であり、そのやるせなさが「芸」であるから、この芸をまねることが読者にとっては重要になる、と述べられました。

この点についてのお応えとして、第一に、私(本当は私たち、と言いたいところですが、確認していないので私としておきます)は、小泉義之のエクリチュールをそのようには受け止めていません。この点はすでに檜垣さんにも伝わっていると思いますが、私は、「小泉義之のほぼすべての主張は無理筋あり、実現不可能」だと感じたことは全くありません。真剣にその主張の実現を考えています。

その上で、檜垣さんは、「小泉のパフォーマンスは「良識人ヒューマニスト」を小馬鹿にしつつ、その先をかいまみせながらも、自分自身が「良識人のヒューマニストのアップヴァージョン版」しか示せない構造になっている」と指摘します。とするならば、小泉義之の後に続く者が小泉のパフォーマンス=芸を真似る行為とは、「良識人のヒューマニストのアップヴァージョン版」をさらにアップヴァージョンするだけのものでしかないのではないか、そのようなことをしてなんの意味があるのか、どのような展望が開けるのか、正直にいって分かりません。それは哲学業界にのみウケる宴会芸にすぎないのではないかと疑っています。

百歩譲って小泉義之が、万が一、ほぼ無理筋の主張を単にパフォームとして行っているとして、ではその目的は何かと考えたとき、それは、そのような一見無理筋にみえる、実現不可能にみえる主張を真剣に引き受け、それを真に実現しようとする者を生み出そうとしているのだとしか考えられないのではないでしょうか。仮に、小泉義之が檜垣氏の言う通り、自己諧謔をもってパフォームしているとしても、そのようなパフォームの内に存在する願いを真に受け、引き受けることが、小泉のエクリチュールに応答することだとしか思えません。

第二に、そもそも、なぜ檜垣さんが、それほど小泉義之の主張を無理筋とか、実現不可能と受け取るのか、不可解です。檜垣さんが「実現不可能」な例として挙げているのは、「たとえばすべての障害者が町中を溢れる社会」、本書の第5章、貞岡論文で主題として扱われている「子供の生み捨てが可能な社会」[i]ですので、これらを例に説明します。

2023/02/11

まず、「子供が生み捨てられて平気な社会」ですが、これは小泉義之の主張のなかで最もたやすく実現できる主張の一つではないでしょうか。私は奈良・平安時代の研究もしておりましたので、前近代社会のことを常に考えています。前近代社会には、しばしば小泉義之の主張するような社会の片鱗が存在します。前近代社会には、何が何でも実子を自分で育てなければいけない、という規範はなく、養子をとることがごく普通の選択肢として存在しています。そして『日本霊異記』や『今昔物語集』にみえる多くの捨て子譚は、当時の人々が、捨て子を拾って養育することが十分にあり得たことを示しています。歴史的に見れば、生殖と養育はかなり簡単に分離できるとしか思えません。

そして、「障害者が町中にあふれる社会」とは、まさに前近代社会において存在したあり方でしょう。障害者や狂人の収容が始まる以前、障害者はそこら中にいたとしか考えられません。日本の中世社会では、非人集団が障害者をさらっていってしまい障害者が多数派のコミュニティが形成される状況が起こりますが、とはいえ彼らは隠されていませんし、京都を中心にいたるところで働いていたはずです（なお、この非人集団のあり方は、小泉義之が別の箇所で想像している「障害者だけで暮らす社会」（『生殖の哲学』p114）に接続できると思います）。

進歩史観はすでに否定されており、したがって現在の社会が最も優れた社会だとは到底考えられません。そのため私は、前近代社会が、もはや参照できない過去の時代とは全く考えていません。現代よりもましなことはたくさんありますし、そもそも価値観の激変がしばしば起こっていることが重要なことです。そして、小泉義之もまた、前近代社会のことを常に念頭においています。それは、小泉義之がしばしば、前近代の用語を文中に入れ込んでいることからわかります。一例を挙げれば、これらを救済することが国家の根本的責務だとして、小泉義之がしばしば書くところの「鰥寡孤独（かんかこどく）」（＝寡夫・寡婦・単身者）とは、古代国家の法律用語です。

とはいえ、古代・中世社会の例がどうしても荒唐無稽だと感じる方もいるかもしれませんので、現代の例を挙げます。今、「生み捨てられる社会」は、現代のほうがより簡単に実現可能と私は考えます。それは、マイナンバー制度が普及しつつあるからです。マイナンバー制度について否定的な研究者は多いですが、マイナンバー制の容認と引き換えに戸籍制度の廃棄を要求することは可能ではないでしょうか。それはマイナンバーを拒否するより利益のあることではないでしょうか。戸籍を消滅させ個人単位の登録だけの社会になれば、本書第 5 章で検討されている生殖と養育の分離にかなり近づくのではありませんか？戸籍制度の廃棄は、家制度の廃棄・婚姻不平等も一気に解決しますし、毒親と縁を切りたい子供にも有益です。全く実現すべき善である上、明治以降の浅い歴史しかない近代戸籍制度の廃棄を夢見ることがそれほど荒唐無稽だとは思えません。少なくともユダヤ人の絶滅を実現しようとするよりは荒唐無稽ではないはずです。それなのにどうしてこの程度のことが実現不可能と信じられてしまうのでしょうか。

以上をふまえ、拙稿（「狂気、あるいはマゾヒストの愛について」）に関する檜垣さんのコメントに応答したいと思います。檜垣さんは、「吾妻の民主主義的な欺瞞を含んだSM論がどうあっても優勢になるはず」と述べ、「戦後民主主義はどんな言説のなかでも強いのではないか」と述べておられます。確かに、現在、言説の上では民主主義は強いか

もしれません。しかし、実践ではどうでしょうか。「真性」のサディスト・マゾヒストを待つまでもなく、ノーマルな人々の間においてすら、「民主主義的な」セックスが優勢なのでしょうか？そんなはずがないのではないでしょうか？

私は、民主的で、男女対等なセックスが優勢になる世界のほうが、全く「無理筋」で「実現不可能」なものだと感じます。そんな社会は歴史的に一度も存在したことはないし、私は想像することすらできません。まずもって、どのように始まるのでしょうか？それはいったいどのような体位なのでしょうか？どのように同意を取れば真に相手を尊重したことになるのでしょうか。女性器と男性器をどのようにつかえば男女対等になるのでしょうか？全く見当もつきません。いろいろと語られていることは知っていますが、到底信じることができません。対等で民主的なセックスが優勢になる社会とは、「生み捨てられる社会」よりもはるかに非現実的なものではないでしょうか？

私が拙稿で念頭に置いていたことは、程度の差はあれ、古川のようなマゾヒストは実はどこにでもいるということです。暴力や支配から発する愛は、実はそこら中にありふれているものだということです。卑近な例ですが、愛する者からの「壁ドン」や、明確な同意を取らない性的接触を暴力と受け取らない者、そこに愛情を見出す者はたくさんいます。そうでないという思い込み、そして今はそうでなくてもそうなることが良い方向だという意識は虚偽意識です。言説としてではなく、そのあり方を直視すべきです（虚偽意識に基づく議論はしないことも、小泉義之のエクリチュールだと考えます）。

重要なことは、なぜ、檜垣さんはこのような荒唐無稽な社会の到来を信じることができるのに、小泉義之の主張を信じることができないのか？ということです。この檜垣さんの姿勢にこそ、「狂気」が、フーコーのいう「「別の傾向」の狂気」があるのではないでしょうか。このような狂気をとらえ、ここに対決線を引くことが、私が考えるところの、小泉義之のエクリチュールへの応答です。「まずは自分の日常を疑う、自らの正気を疑うということからはじめられるようおすすめします」。

---

[i] エクリチュールを問題にしていますから、一応小泉義之がどのよう檜垣氏が上げたような「無理筋」の主張を記しているか挙げておきます。

① 「いかなる子どもであれ、子どもを生み落とすだけで放置したって、何の問題にもならない社会を構築することは簡単であって、本当の問題はその程度のことを誰も想像してみることすらできなくなっているということです。」（『生殖の哲学』pp.110-111）

ここでは、檜垣さんの主張されるような、小泉義之の主張を無理筋として実現可能性を検討すらしない姿勢が批判されていると私は解釈します。

② 「地方老人が都市の中心部を徘徊し、意味不明の叫びを発する人間が街路にいるほうが、よほど豊かな社会だと思う。そのためには何をなすべきかと問題を立てています。」『生殖の哲学』p.111）